

〔早稲田大学史セミナー拡大版シンポジウム「新しくみえてきた早稲田の歴史——『百五十年史』編纂過程の成果と課題〕

## 『早稲田大学百五十年史』の概要とそこに求められるもの

湯川次義

皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました、教育学部の湯川次義と申します。今日は、このようにたくさんの方々に参加いただき、大変うれしく思います。

初めに、自己紹介を兼ねて、私と大学沿革史の関係を少し述べさせていただきます。私個人としましては、戦前・戦後の女性の大学教育機会の確立とその特徴を明らかにするという研究を行っています。専門領域は大学教育史と言うことができます。

大学沿革史に関しては、今日のコメンテーターの寺崎昌男先生をはじめとする五人からなる、野間教育研究所の学校沿革史研究部会の委員として、十数年間研究してまいりました。この研究活動の中で、大学沿革史関係では三冊の紀要を共同執筆しています。その他、国士舘大学の『国士舘百年史』の専門委員を八年ほどつとめ、資料編（二〇一五年刊行）上・下二巻の編集に関わり、また現在は通史編の一部を執筆しています。

野間教育研究所の活動では、沿革史を評価する立場から研究を進めてきましたが、『国士舘百年史』でいざ執筆者

になって、沿革史を記述するという作業に取り組んでみますと、沿革史の執筆はなかなか難しいということに気づきました。評論と実際の執筆とは異なるということに、改めて気づかされているところですよ。

現在私は、後でもご紹介いたしますが、『早稲田大学百五十年史』に編纂委員、編纂専門委員、あるいは、第一巻の執筆者として関わっています。このシンポジウムでは、二点お話ししようと考えています。第一点目としましては『百五十年史』の概要を紹介いたします。第二点目としては、この『百五十年史』の編纂あるいは記述の方向性や特徴についてお話しします。第二点目について少し説明を加えますと、『百五十年史』をどのように意味づけるか、どのような価値を付与するか、意味ある沿革史にするにはどうしたらいいか、という点であります。この点は、外部の人から見れば、『百五十年史』に期待するものと言えるかと思えます。そこで私としましては、読者が「期待するもの」を編纂・執筆する側から表現したものとして『百五十年史』に求められるもの」というタイトルをこの報告に付けた次第です。なお、本日のシンポジウム全体のタイトル「新しくみえてきた」の部分は、次に登壇する木下さんのお話の中心になると思います。

それでは、早速、本題に入ります。お手元にあるレジュメと資料に沿った形で話をさせていただきます。

まず、本学『百五十年史』刊行の契機です。今、李成市先生のごあいさつの際にも説明がありましたけれども、一つは創立百五十年を記念するものということです。更には、現在早稲田大学では「Waseda Vision 150」という将来計画を設定して、創立百五十年に向けて早稲田をいかに活性化させていくか、あるいはいかに将来を展望した発展を図るかを計画していますけれども、その中にこの『百五十年史』編纂が、「早稲田らしさと誇りの醸成をめざして―早稲田文化の推進―」として位置づけられています。今後、百五十年記念事業が明確化された場合には、その中にこの『百五十年史』の刊行も位置づけられるものと思います。

次に、中身に入っていきますが、編纂の経過および組織です。経過につきましては、最初は二〇〇九年一二月に編纂準備委員会が作られたようです。私自身は、まだこの時点では組織に関わっていませんでした。続きまして二〇一〇年六月には編纂委員会が組織されて、これが編纂事業の正式な発足であったといわれています。そして、現在に至っています。第一巻の執筆者は、専任教員の三人に加えて、次に登壇する木下さんなどを含めた非常勤嘱託二人の方です。合わせて五人で、第一巻を執筆する予定です。

また、組織につきましては、資料の1をご覧ください。その中の表1（二八三頁掲載）の「編纂組織」が『百五十年史』に関わる組織です。今、編纂の開始時期などを申しましたが、表の上から見て編纂委員会、専門委員会、それから第一巻の編集会議という組織になっています。実際には編纂を実務的に支える事務局がありまして、これは早稲田大学大学史資料センターの中に置かれています。

野間教育研究所の『学校沿革史の研究 総説』（二〇〇八年）に書きましたけれども、本格的な大規模な沿革史の編纂の場合は、表2（一八三頁掲載）にありますように、A「周年記念事業委員会」、B「編纂委員会」、C「執筆委員会」、D「編纂室」というような形の編纂組織が採られることが多く見受けられます。

Aの「周年記念事業委員会」は、まだ早稲田では作られていないのですが、先ほど申し上げたように、沿革史刊行は「Waseda Vision 150」の中に位置づけられています。ですので、この『百五十年史』も近い将来には、周年記念事業委員会のような組織の中に組み込まれるものと考えます。

またレジュメに戻りまして、『百五十年史』の概要についてお話しします。「刊行計画」としましては、全三巻の通史編から成っています。そして、各巻は八〇〇から八五〇ページを予定しています。これは現時点での計画でありまして、今後若干の変更もあると思います。各巻の対象時期を説明しますと、第一巻は一八八二年の学校創設から一九

四九年の敗戦後の旧学制まで、第二巻は一九四九年の新学制下の改革から創立百年を迎えた一九九〇年前後まで、第三巻は一九九〇年前後から創立百五十年を迎える二〇三二年前後までです。また、各巻の編集・執筆期間は、第一巻が二〇一五年から二〇一九年、第二巻が二〇一五年から二〇二四年、第三巻が二〇一五年から二〇二九年まで、という予定です。

第一巻で扱う時期を既刊の『早稲田大学百年史』との対比で考えますと、『百年史』の第一巻から第三巻、そして第四巻の中頃までが、『百五十年史』第一巻で扱う時期です。内容や分量の点から見ても、『百年史』の第一巻から第四巻の途中までといえますと、約三千五百ページほどになります。それを約八五〇ページにまとめるということですので、かなり要約的なものにならないと考えると考えています。

次に「編纂方針」ですけれども、これは『百五十年史』編集大綱として定められています。後ほど説明する「『百五十年史』に求められるもの」と重なる部分も多いことから、ここではポイントだけ説明いたします。

現時点での基本方針は、第一に「近現代日本の歴史を背景におき、国の教育政策・制度あるいは他大学の動向等も踏まえながら、早稲田大学の歴史を体系的・系統的に明らかにする」と設定しています。特に日本全体の大学の中で私立大学の担った役割及びその中で早稲田大学が占めた位置を明確化する、ということにポイントを置いています。

二番目の方針としては、「早稲田大学の現状に対する認識を深め、未来に向けて大学像を構築していくことに寄与する」と設定しています。これは、「Waseda Vision 150」などの中で、将来の早稲田大学を見据えた構想を練る際の基盤になるようにということです。

三番目の方針は、先ほど李先生からお話しがありましたけれども、「自己点検・自己評価の成果として位置づける」ということです。更に、四番目としては「学生・教職員・校友のアイデンティティの構築につなげるものとする」

次いで五番目は「創立百五十周年を記念するものとする」と設定しています。

以上のような全体の基本方針の下で、更に編集方針を定めています。一つ目は、「単なる制度史に偏しないように注意し、文化史・社会史なども組み込んで、体系的・系統的な編集・執筆を目指す」という点です。次に、二つ目ですけれども、『百年史』を編纂・刊行してから三〇年や四〇年近く経過しましたので、「新たな研究成果の反映や新資料の活用に心掛け」新たな研究を踏まえて編集・執筆することとしています。そして、『百年史』と重なる時期については、その記述と成果を活用しつつも、新たな資料や研究成果を活用し、最新の学術水準を担保した内容とする」と定めました。以下は列挙しますと、三つ目は「学生・職員など大学の構成主体それぞれの状況が把握できる内容」とする、四つ目は「否定的側面も含めたバランスある編集・執筆を心掛ける」。五つ目は「読みやすさを念頭において編集・執筆する」という方針です。これは後で申し上げますが、『百年史』の「反省」の上に立つものとも言えるでしょう。

次に、第一巻の目次案ですけれども、資料2（掲載はしませんでした）をご覧ください。これは現時点での目次構成ですけれども、今後、修正することが十分あります。全体としては四部で、一四章から成り立っています。

前にも申しましたが、第一巻の対象時期は一八八二年の東京専門学校創立から、一九四〇年代半ばの戦後復興期までです。敗戦後の旧学制の部分までということになります。敗戦後の新学制と旧学制などの時期区分をどうするかという点については、いくつかの考え方が成り立ち得るわけですけれども、現状では私たちは戦前の旧学制の終わりをもって第一巻として、第二巻のスタートは新学制への模索からとし、アメリカ教育使節団報告書や教育刷新委員会なども含めて、第二巻を書き始めたかどうかという考えに、今のところは落ち着いています。

またレジュメに戻りますと、2の『早稲田大学百五十年史』に求められるもの」という点ですが、これは本日の

私のお話の中心部分です。この部分を考えるに当たって参考にしましたのは、私どもが関わってきました野間教育研究所の紀要『学校沿革史の研究』や研究会での研究成果、更にはコメンテーターでいらっしやる寺崎昌男先生のご著書などです。

まず、求められるものの(1)としましては、「学術的評価に耐え得る大学沿革史」であるということです。寺崎先生は『学校沿革史の研究 総説』の中で、大学沿革史の編纂・刊行の意味は「アイデンティティの確認」とか「アカウンタビリティの責任」にあるとし、更には「沿革史が式典用の著作物、お土産として配るようなものから、学術的な研究書として推移してきた」と書かれています。そして、重要なのは①に記したように「大学の構成メンバーによる自己点検、評価としての沿革史」であると言われています。また「学術的な沿革史を発行することとは、文化教育機関としての大学の基本的責務の一つ」であるとおっしゃっています。

更に注目すべき点としましては、②ですけれども、沿革史は各大学の歴史についての記述というよりも、現在の学園が規定する一定の作品であると、寺崎先生は書かれています。これには、ちよつと説明が必要ですので、先生のお書きになった部分を読ませていただきます。すなわち、個別沿革史は各教育機関が経てきた「歴史そのものの記述と言うよりも、その歴史のもとで築いてきた『現在の学園』が規定する、一定の『作品』であるといつてよい」としています。続けて、寺崎先生は「記述・編纂・刊行のすべてのプロセスに反映されるのは、現在の経営・研究スタッフの持つ学問水準や経験的熱意、組織としての合意の水準、さらには学校・大学の将来像に対する構想であり、それらの差異に応じて、沿革史は出来栄を異にする」と書かれています(『学校沿革史の研究 総説』)。そして、「総体としての個別沿革史の水準が示すものは、その学校の現在の水準である」とも書かれています。これは非常に厳しい評価基準だと思えます。ですけれども、今後の沿革史編纂に対して、非常に示唆に富む指摘でありまして、私は的確な

表現だと考えます。

私人の研究で、いろいろな大学の沿革史を利用してはいますが、この大学はこの程度か」と言っては失礼ですけど、「この位の沿革史で終わってるのか」といったことを考えたりします。つまり、一方では大学の名声や社会的威信とのギャップを、もう一方では「この大学は、結構いい沿革史を発行しているな」ということを感じます。そのときに、寺崎先生のこの指摘は非常に大事なことを突いているなと実感します。

次に、今日ここに参加されている京都大学文書館教授の西山伸先生のお話を取り上げさせていただきたいと思えます。西山先生は、『大学沿革史の研究 大学編1』（野間教育研究所）で「大学沿革史の課題」を何点が挙げられています。一点目は、「一九八〇年以降、大学沿革史編纂が本格化して、より刊行点数が多い」「大規模沿革史がある」、あるいは「通史編資料、写真集など、多角的な視点の研究沿革史が多くなった」と指摘されていますが、大事なことは、「沿革史が質の向上を達成してきている」という指摘です。達成までいかないかもしれないけれども、「質が向上してきている」ということですね。西山先生によれば「学内外の一次資料を用いるなど、実証的手法が使われている」、あるいは「歴史書としての価値を有するものになってきている」ということです。

一方、大学沿革史と一般的な歴史研究の循環が未成熟である、という指摘も重要だと考えます。これは、先ほど申し上げたような、沿革史の質が多様であることが一つの原因ではないかと思えます。

更に、西山先生は「頼りにされる大学沿革史」の指標として、AⅡ歴史叙述の基盤となる資料の博搜、IⅡ資料に基づく大学史上の事実関係の確定、ウⅡアとイを踏まえての様々な事象についての考察・評価、の三つを挙げています。例えば、大学紛争を例に取って西山先生は書いていますが、大学紛争を歴史的経緯へ位置づけることが大事であった、大学紛争のその後への影響であるとか、あるいはその大学の沿革、紛争の性格や特徴がどうであったのか。ある

いは他大学の事例との比較。こういった点を捉えて記述すべきではないかということを示しています。

現状の沿革史はアからイの段階に踏み込みつつあって、ウの資料の収集と事実関係の確定を踏まえた考察・評価に至った沿革史はなかなか無いと指摘していますが、西山先生も京都大学の『百五十年史』でしょうか、『百二十五年史』でしょうか、その編纂に関わられているということですので、ぜひそれに期待したいと思います。早稲田の『百五十年史』も、西山先生から「ウの沿革史」と評価されるものになればいいと思いますが、なかなか難しいと考えます。

私自身は、これまでも申し上げましたが、自分の研究で沿革史を活用しています。その場合、沿革史記述に頼るだけではなくて、記述のもとになっている第一次資料を、その学校に向いて確認する作業をなるべくしようと考えています。沿革史記述には、研究として利用する場合に誤りが見られたり、解釈が不十分であったりすることもありますので、研究者としては沿革史記述だけを根拠にして論文を書くのは難しいと考えます。

逆に言うと、沿革史の執筆では、歴史研究の成果を取り込むことが少ないとも考えています。今後は、なるべく西山先生のいうウの段階を目指し、『早稲田大学百年史』の記述や構成を精査することが大事になります。あるいは、新資料を発掘する、今までの研究成果を検討する、今回のような大学史セミナーを開催するなど、そういったことが大切と言えるのではないのでしょうか。

レジュメの三ページにいきます。『早稲田大学百年史』の精査ということですが、『百年史』は長年にわたって資料調査、編集・執筆が行われ、刊行にとっても長い期間が費やされてきたわけですが、その結果かなりの成果がもたらされたと高く評価できると思います。しかし、刊行後三〇年ないしは四〇年たっていますので、その後の沿革史に対する認識の進展とか、その後の新たな資料の発掘などを踏まえますと、見直すべき部分もあると思います。

例えば、教育史を専門とする者からしますと、教育制度はもう少し踏まえられてもいいのではとか、引用文が長い、



事実の持つ意味づけが少ない、あるいは文がやや難解であることなどが指摘できるかと思えます。私が申し上げるのも失礼かもしれませんが、沿革史の標準として位置づくという評価をするのは、やや難しい面もあると考えます。

次に、新しい資料調査について話しますと、学内資料の調査、聞き取り調査、資料のデジタル化などを進めています。学外の資料調査としましては、国立や都立の公文書館等の資料やGHQの中のCIE文書を調査しまして、戦後の大学改革の中で早稲田大学を捉えようとしています。

次に『百五十年史』に求められるもの(2)です。百五十年史では、近現代の日本の歴史、あるいは、教育政策・制度を踏まえた早稲田大学の歴史の体系的・系統的な記述をしたいと考えています。政治とか社会、あるいは教育政策・制度の中で自分の大学の歴史を捉えるという点について補足しますと、当該大学の沿革史であることから、その大学の歴史的な事実、あるいは歴史的な展開を記述するのは当然であります。では、執筆する場合には、自分の大学の事実だけの記述にとどまってよいのかどうかということです。例えば、先ほど西山先生の例でもお話しした大学紛争の記述の仕方に学ぶことができると考えます。

国の政策や時代背景を踏まえ、さらには他大学との対比などを含めなければ、その大学の歴史的事実を意味づけることはできないと思います。単に「自分の大学の事実、こうでした」と記述するだけでは、沿革史としては高い評価は受けないと考えます。

私の経験を踏まえ、国士舘大学のキャンパスの移転ないしは増設という点を例にして申し上げます。同大学の主なキャンパスは世田谷区にありますけれども、一九六〇年代後半に町田市の鶴川という所にキャンパスを造りました。そこに、教養部の移転、初等教育専攻の移転、あるいは短大の移転などが行われました。こうした事実について詳しい記述が必要なわけですが、しかしそれだけにとどまっていたら良い沿革史としては評価されないと考えま

す。例えば、なぜそのような移転が必要だったのかという記述が必要です。キャンパス増設の背景をみますと、同大では高度経済成長期に学部を増設し、その結果学生数が急増し、さらには学生の水増し入学をした訳です。それに対して文部省からは正要求が出されて、そして教育条件改善の必要性からキャンパス増設が迫られました。このような事実を踏まえて、増設や短大などの移転を位置づける必要がありますし、さらにキャンパス増設・移転は、国士館だけの問題でなくて、この時期には他の多くの私立大学でも起こりました。このような大学のキャンパス増設・移転の全体的な流れの中に位置づける必要があると考えます。更には、当時は都心部の土地の使用制限が法律で定められたり、あるいは、都心部の土地価格が高騰した事実があります。以上のような全体を捉えてキャンパス増設・移転の意味を記述すべきではないか、と考えます。

次の①の「近現代の歴史、教育政策・制度を踏まえた早稲田大学の歴史の体系的・系統的記述」の部分は、省略したいと思います。次に、②の「包括的な歴史」の説明に移ります。「包括的な歴史」としましては、早稲田大学の戦前期を見ますと、学部・専門部・予科・大学院・附属学校などがあつたわけですが、これらを全体として捉えることが必要です。あるいは、大学の運営や教育研究、学生なども捉えなければいけないと思います。そこに書きましたけれども、早稲田賛美に陥らないということも、大事なことではないかと考えます。

更に、③の創立理念あるいは建学の理念の意味と展開という点も重要です。ご存じのように、早稲田大学は、学問の独立を創立の趣旨の一つ、重要な柱としていますけれども、その結果、在野精神あるいは反骨精神といったような校風をつくり、全国からそこに憧れて豊富な人材が集まってきました。現在も、果たしてそうなのかということは分りませんし、疑問符が付くところがありますけれども。

この「建学の精神」についても、寺崎先生は非常に示唆に富むことを指摘されていますので、少し説明致します。

寺崎先生は建学の理念について、「言葉によって観念された理念」だけではなくて、言語化される以前の、無形のカリキュラムに表現される精神的環境の中に『理念』があらわれる」といわれています（寺崎昌男『大学は歴史の思想で変わる』東信堂、二〇〇六年）。更には、「建学の理念とは、実は創立後その大学が歴史の中で選択してきた『価値』の総体のことであり、失敗や誤りをも含むその総体の価値」が再吟味と反省のもとで確認できる、としています。そして寺崎先生は、ただ単に「建学の理念は、こうであった」ということではなくて、教育の実態や、自校の良さ、価値の中で、建学の精神を捉えなければいけないと指摘されていますが、傾聴に値すると思います。

次に（3）の「大学、しかも私立大学であることの意義の積極的記述」についてです。残り時間がわずかですので簡単に説明します。私立大学であることの積極的な記述をすべきと考えます。しかし、そうは言いつても、何を記述すればこのような課題を明らかにできるのかというのは、今後、検討しなければいけないと思います。

私立大学の意義を明らかにするためにはまず①の「日本の大学史への位置づけ」が必要です。さらに言えば「官立大学、帝国大学との対比」が重要だと考えます。日本における官学中心の大学政策あるいは制度の中で、私学としての早稲田大学がどうであったのかということですね。この点について少し読ませていただきますと、寺崎先生は戦前と現代に通じる私学の課題を論じていますが、その中で「近代日本の私学は、私学としての『存続』を果たすためには、国家から多くの圧迫や抑圧を甘受させられてきた」としまして、明治以来日本の社会は教育を専ら「公〓国家」のために行われる営みとして捉え、その範囲内で私学に対して財政的補助を行ってきた政策などを挙げています（寺崎『大学は歴史の思想で変わる』）。

その中で私学の歴史について、私立学校の歴史は日本近代学校史、大学史の構造的な一部分であるということ、更に明治以来私学の建設とその維持への努力がなかったならば、日本の近代教育がいかに貧しいものとなっていたかが

明らかである、と記し、私学の果たした役割を高く評価しています。今後の私学は、私的なものを含みながらも、公共性をどう生かしていくかが重要ということも述べていますけれども、総体としましては日本の教育における私学の重要性和私学研究の意義が指摘されていると思います（寺崎昌男『大学教育の創造』東信堂、一九九九年）。

次は「自立的な学問形成」という点です。私立大学には帝国大学とは異なる独自の業績がありました。早稲田の場合には、その例として文学、政治、歴史学などを挙げることができます。この点は第一巻の時期に該当しますが、長くなりますので簡単に申し上げます。寺崎先生は、帝国大学教授たちの主だった任務は欧米の既成の学問の輸入や紹介を中心として、専門に分かれた学問を教授することにあつた、と指摘しています。すなわち、東京帝大教授は、欧米直輸入の学問的枠組みを教授していたのに対して、私学の中にはそれに捉われず、それを突き抜けて独創的研究を進めた大学があつたとして、国学院大学の折口信夫、早稲田の大山郁夫や津田左右吉、慶應義塾出身の野呂榮太郎などの名前を挙げています。更に、これに関連して寺崎先生は、明治・大正期の早稲田大学が文学、政治学、歴史学などの幾つかの分野で帝大とは明確に異なる独自の業績を生み出した、としています（寺崎『大学教育の創造』）。このような官学とは異なる独自の学問形成が私学にもあつたのであり、これを記述する必要があります。

更に、学部構成にしましても、早稲田大学では、帝大とは異なる政経学部とか、文学部、あるいは商学部などがつくられましたけれども、これらは東京帝大などの学部・学科組織と対比して特徴的であります。これについてもコメントを用意していましたけれども、時間もありませんので省略させていただきます。

次に、bの「大学史上のエポックについての記述」です。以下に列挙しておきましたけれども、負の歴史についての積極的な記述も必要である、ということですが、ほんの一例ですが、早稲田大学にも積極的な戦争協力であるとか、あるいは入試問題の漏えい事件などもありました。そういったことも、しっかりと捉え直さなければいけないと思

ます。次に、cの「大学全体における早稲田大学の特色」の部分は、日本の大学全体の中での早稲田の特色ということですが、これまで話したようなことですので、ここでは省略します。

次は②の「私立大学の歴史における早稲田大学」についてです。私立大学の研究なくしては日本の大学史は語れないことは先に説明しましたけれども、早稲田大学は、多様な質や専門領域を持つ私立大学の中でも、特に特色があると言えます。早稲田大学は、全体としては、帝大も含めまして、日本の大学の歴史的展開をリードした大学の一つであったと考えます。特に、私学として先駆性があったり、あるいはリーダーシップを發揮してきたと思いますので、その辺を早稲田賛美にならない範囲で記述すべきだと思います。

次に(4)の「早稲田大学が生み出したものについての記述」です。時間の関係で内容には入りませんが、「生み出したもの」の中で学術、文化、芸術について触れます。芸術の部では、演劇や文学で早稲田は特色を發揮したと言えます。また卒業生の社会での活動・活躍としては、戦前には政治家、ジャーナリスト、文学家あるいは社会主義思想などの面でも早稲田の出身者あるいは教員が注目される活躍をしました。さらには、自然科学分野やスポーツ分野でも大きな業績がありました。

それから、(5)の「教育の実体的側面についての記述」についてです。教育の実態的側面についても記述されることが少ないわけですが、学科課程なども記述できればと考えています。

続いて(6)の「学生や女性についての丹念な記述」について説明します。私は、女性の大学教育について研究していることから、こういう点に特に気付くという面がありますけれども、この他に学生の入学地域や学生文化、学生活動、学生生活、学生街なども重要な記述事項になると思います。教育機関としての大学であるわけですから、学生が何を学んで、どのような学生生活を送って社会に出ていったのか、という点も注意すべきです。今後の大学沿革史

では、学生がどのような学びをして、学生の人間形成や能力形成に、大学がどのような影響を及ぼしたのかが、記述事項として丁寧に扱われることが望ましいのではないかと思います。ただ、何をもってこれを証明するかという点は、かなり難しいと考えます。

時間が来ましたけれども、資料4の「学生生活」について触れます。『明治大学百年史』は、創立以来の百年間にわたって、学生の動向や学生生活について記述しているということを、野間教育研究所の紀要『学校沿革史の研究 大学編2』（二〇一六年）にまとめてありますので、ご参照いただければと思います。

最後になりますけれども、(7)に掲げたような、例えば国際交流(留学生も含む)の歴史、特別支援教育の歴史、キャンパス問題(建物や施設)などの「今日的課題の原点を探る記述」も必要ではないかと思えます。

報告のまとめとして最後に申し上げますと、高い評価を受ける沿革史とはどういうものか、あるいは『早稲田大学百五十年史』に期待されるものは何なのでしょうか。この点を仮説的にまとめますと、明確な編纂方針の下で、資料に基づいて自校の研究教育と発展などの全体的な実像を、その正負も含めて正確に記すとともに、日本の近現代の流れの中に明確に位置づけ、教育史、文化史などの学術研究にも活用されるような水準の高い沿革史が必要ではないかと思えます。このような条件を備えた沿革史が、必然的に自己点検・自己評価の役割を果たすことができると考えます。

以上、限られた時間の中で、『早稲田大学百五十年史』の概要と、そこに求められるものについてお話をしました。至らない点もありましたが、これで私の報告を終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

※本稿は、二〇一七年一〇月九日に開催された早稲田大学百五十年史編纂委員会・早稲田大学大学史資料センター主催の早稲田大

## 【資料1】

表1 『早稲田大学百五十年史』編纂組織 (2017年9月現在)

| 編纂組織                                 | 構成員  | 主要任務   |
|--------------------------------------|--|--|
| 早稲田大学百五十年史編纂委員会 (2010年6月1日設置)        | 総長指名の理事、大学史資料センター所長、文化推進部長、広報室長、図書館長、各学院からの選出者等で構成 (19名) | 全学的規模。編纂方針等について協議                            |
| 早稲田大学百五十年史編纂専門委員会 (2010年7月23日より開催)   | 大学史資料センター所長、編纂委員からの選出者で構成 (6名)                           | 内容・構成をはじめ編纂に関する諸事項を具体的に協議                    |
| 『早稲田大学百五十年史』第1巻編集会議 (2016年9月13日より開催) | 第1巻の執筆担当者を中心に構成  | 第1巻の編集執筆作業について具体的に協議                         |
| 事務局 (早稲田大学大学史資料センター内)                | 大学史資料センターのスタッフを中心に構成                                     | 編集執筆関連作業、資料収集・整理作業、連絡調整等 (事務局会議、編集ワーキンググループ) |

表2 典型的な編纂組織

| 編纂組織 (名称例)          | 構成員                    | 主要任務         |
|---------------------|------------------------|--------------|
| A: 周年記念事業委員会        | 理事長、学長、評議員、教員代表、同窓生、等  | 予算、編纂大綱      |
| B: 編纂 (編集) 委員会      | 学部・部局の代表、記念事業委員会の代表、等  | 沿革史の構成、編纂要綱  |
| C: 執筆委員会、専門委員会、部局部会 | 通史・部局の執筆者              | 原稿の執筆        |
| D: 編纂 (編集) 室        | 編纂委員会委員長、助手、嘱託、職員 (私立) | 資料収集・整理、連絡調整 |

学大学史セミナー拡大版シンポジウム「新しくみえてきた早稲田の歴史——『百五十年史』編纂過程の成果と課題」での報告を原稿化したものである。